

心の元気を取りもどすために。

うつ病や統合失調症などの“こころの病”は、いまや多くの人が経験する疾患ですが、社会にはまだまだ誤解や偏見があります。こころの病を持つ人たちが安心して暮らせる社会環境づくりをめざし、社会復帰をサポートする活動や自殺を防止するためのプロジェクトを行っています。

全国こころの美術展

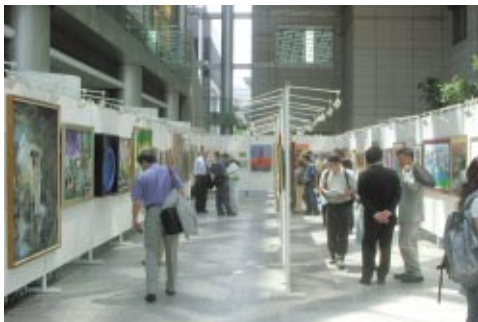
精神疾患は脳神経機能の病気のひとつで、他のからだの病気と同様、適切な治療により症状は改善されます。しかし、社会での誤解や偏見が“こころの病”を持つ人たちの社会生活を狭め、治療や回復の遅れにも影響を与えています。

全国規模の公募展を開催

自分を何かのかたちで表現したい、自分の価値を認められたいという願いは誰もが持つ自然な気持ちです。それはこころの病を持つ人も同じです。喜びや楽しい・寂しい気持ちなど、言葉で伝えきれないことを何かで、あるがままに表現し、伝えたい。そのような中で2001年財団法人全国精神障害者家族会連合会*が事務局となって、こころの病を持つ人たちのアート作品の公募展「全国こころの美術展」**がスタートしました。ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会が支援した2004年の第4回展には油絵、水彩画、貼り絵、版画など全国から525点の応募があり、100点の入賞・入選作品が東京と山形の会場で展示されました。

目標を持ってうれしい

全国規模の絵画展に応募し評価されることは、自分への自信を生み、生活意欲や社会参加意欲を高めることに通じます。また作品を通して、一般の人に豊かな創造性や表現力を知ってもらうことは、精神疾患への理解を深め、偏見のない社会づくりにもつながります。「目標を持ってうれしい」と応募者の多くが感想を述べ、「感動した」「また来たい」と一般の来場者が記しています。本美術展への支援を通して、こころの病に苦しむ人たちの生きがい発見・社会復帰を応援しています。



*財団法人全国精神障害者家族会連合会（全家連）
全国の都道府県にある精神障害者家族会で構成する全国組織。

**全国こころの美術展
精神障害者を支援する全国の団体によって組織された全国こころの美術展実行委員会により開催。
参加団体：(社)日本精神科病院協会、(財)全国精神障害者家族会連合会、(社福)全国精神障害者社会復帰施設協会、(NPO)全国精神障害者地域生活支援協議会、全国精神保健福祉相談員会、(NPO)全国精神障害者団体連合会、日本精神保健福祉士協会、(社)日本精神科看護技術協会、(社)日本作業療法士協会

自殺防止プロジェクト

日本の自殺者数は年々増加し、年間3万人を超えています。自殺未遂者は少なくともその10倍は存在すると推定され、未遂・既遂が1件生じると、強い絆のあった最低5人は深刻な心理的影響を受けると考えられています。いま、自殺防止は、社会全体で取り組まなければならない大きなテーマのひとつとなっています。

「救いを求める叫び」を聞く

人はなんの前触れもなく自殺を遂行するわけではありません。たいていは何度か自殺未遂というシグナルを点滅させています。その赤信号は「死にたい」という意思表示よりも、「生きたい」と無意識のうちに願う魂からの悲痛な叫びといわれます。家族や地域がその苦しい気持ちを受けとめ、情報を共有し、社会全体として連携サポートをすることが、自殺を防ぐうえで大きな役割を果たすのです。

自殺防止の手引書の発行を支援

ジョンソン・エンド・ジョンソン社会貢献委員会は、30年以上にわたって自殺防止に取り組んでいる社会福祉法人いのちの電話*と日本自殺予防学会**による「地域と家庭における自殺予防のための手引き」の発行を支援しました。この手引書には、人はなぜ自殺するのか、自殺を考えている人とどう向き合うか、自殺の危機にある人をどう援助するかなど、自殺心理の理解から具体的な援助方法までがわかりやすくまとめられており、周りの人の理解と思いやりが自殺をくい止める大きな力になることを示しています。



*いのちの電話

自殺予防を目的として1971年に発足したボランティアによる市民活動。日本いのちの電話連盟傘下に、全国51か所の電話センターがあり、電話相談を通して、地域に根ざした自殺予防活動を展開。年間約70万件の相談があり、主婦を中心とした約7500人のボランティア相談員が対応している。なお今回は社会福祉法人いのちの電話(東京)を支援。

**日本自殺予防学会

精神科医、心理学者が中心となって1970年設立。自殺およびあらゆる自己破壊行為を防止するために、研究、実践、教育、啓発活動を行っている。